「呼子と口笛」の口絵と『基督抹殺論』

――秋水の遺著に重ねた啄木の天皇制批判――

近藤典彦

一　はじめに

未完の、手製の詩集「呼子（よぶこ）と口笛」は啄木詩の最後の、最高の達成を示すものとして、つとに有名である。文献学的な仕事や作品分析・批評等の仕事は岩城之徳、今井泰子らの業績を中心にして相当の蓄積がすでにある。しかし、『一握の砂』研究の厚さにくらべると「呼子と口笛」研究は薄手の感を免れない。未解決の問題の一例が次ページに掲げる口絵の意味である。

これは手製の詩集「呼子と口笛」の目次（北原白秋『思ひ出』とほぼ同数の詩の表題を書きこめるようにした余白七ページ分を含む）の後で、本文の直前のページに描かれている。ごらんのように爬虫類のようで翼らしきものをもった動物の絵が上段にあり、中段には黒い太陽が光芒を発散させつつ紅の空に沈んでゆくらしきイメージが描かれる。下段は妊娠した十字架（!?）のごときものが地に横たわっている。そしてこの三段の絵の全体をオリーブの葉のようなものがかこんでいる。

詩集「呼子と口笛」は決して暗い作品ではない。幕末の先覚者江川太郎左衛門英龍が暗闇の中に時代の夜明けを翹望しつつ、「さとはまだ夜深し富士のあさひ影」と詠んだ

ときの志に通う暗闇から未来に馳せる視線と、その視線にとらえられた希望とをこの詩集に感じとることができる。それは作品の分析を深めるほどに顕現してくる特質である。[1]「呼子と口笛」の諸詩篇は実に多くの人々によって論じられてきたが、右に述べたように読む人々もあったし、また反対に挫折や絶望の啄木をそれらの中に見る人々もあった。そしてどちらの人々から見ても右の口絵は決してさわやかなものでも希望を感じさせるものでもないのである。なぜこのように奇妙な絵がここに描かれるのか、なぜこの絵は黒が基調になっていて暗いのか、この暗さをとりかこむオリーブ（？）の葉の緑はたしかに明るさを与え中の絵の暗さを救ってはいるが……。口絵は描かれた三つのシンボルが意味不明で奇妙なだけではなく、トーンそのものが奇妙な印象をひきおこすのである。[2]この絵の全面的な絵解きを試みたのは管見の限りでは大沢博「『呼子と口笛』の象徴画の分析」[3]のみである。これから展開するわたくしの分析は氏の見解と全面的に異なる。ただし、中段の絵に関する氏の見解のうち「この黒い太陽は、幸徳事件以来急速に暗黒化してきた日本の象徴であろう」と述べられた箇所が本稿の構想の全体を一瞬にして照らし出す稲妻となったのであった。記して謝意を表したい。

さて、まず次の二つの引用をご覧いただこう。

如此にして其討究の歩を進め、彼等の由来に溯らば、吾人は必ず太古の社会に弘通し瀰蔓せる二大信仰に到達すべし。一は即ち太陽崇拝、他は即ち生殖器崇拝是れ也。

此他両性兼有の神あり、男女生殖器を結合せるの記号あり。埃及の諸神が持せる『生命の記号』(Symbol of life) は十字と卵形を合せる者にして、即ち☥形の

上に卵形を置き♀状を為せる者也。

この二つの引用だけでも口絵の中段と下段の絵解きを一挙におしすすめる。中段の絵の太陽は文中の「太陽崇拝」と、下段の♂をもつ奇妙な十字架ようの絵は文中の「生殖器崇拝」と密接に関係していることは疑いない。出典は二つながら幸徳秋水の遺著『基督抹殺論』[4]である。

『基督抹殺論』（丙午出版社　明治四四年二月一日）は秋水が大逆事件で検挙される一九一〇年（明治四三）六月初めには大部分が書きあげられており、残った部分は予審が終って（一一・九）のちの同年一一月二〇日頃に獄中で書き上げられた。これを書き上げたとき秋水は事件による死刑を覚悟していた。そして刑死直後にこの書は発行された。十二の章からなるこの書の内容は極く手短に伝えるなら以下の如くである。

聖書（新約）の内容は矛盾撞着に満ち、その成立過程は杜撰・虚偽・暴力等に覆われている。よって聖書はイエス・キリストが史上に存在したことを示す何の証左にもならない。聖書以外の史料もまたイエス・キリストの史的実在を何ら伝えていない。（章・一、二、三、四、五、六）

ではキリストなしのキリスト教がいかにして発生しえたのか。祖師が宗教を作るのではなく宗教がかえって祖師を作るという、よくあるパターンに従ってである。そうして作られたキリスト教の起源はいかなるものか。「其根本の教義より枝葉の式典に至るまで、何等独創の事物あることなき也。何等特殊の色彩有ることなき也。総て是れ古代の太陽崇拝、生殖器崇拝に其源を発せる諸信仰の遺物のみ。総て是れ印度、波斯、埃及、猶太、希臘、羅馬の残肴冷杯のみ」（九六頁）なのである。（章・七、八、九）

では初期のキリスト教はいかにして発展しえたのか。歴史的に非実在の本尊をめぐる迷信の鼓吹と淫楽の誘導等々によって無智の大衆をひきつけるやり方によったのである。またキリストの名字と伝記はどのようにしてできたのか。古代東方各国民に行われていた各種の（太陽）神話から材料をとって捏造したのだ。

かくて「予は左の鉄案を下す」。「曰く、耶蘇基督は史的実在の人物に非ず。単に古代神話の糟粕渣滓と残骸断礎とをもて作成したる一個生命なき偶像のみ」（一一九頁）と。（章・十、十一）

キリスト教は以上見てきたとおりの宗教である。これを

二〇世紀の人々が信仰するのは馬鹿馬鹿しいことでありかつ道理に反することである。自分はこのキリストとその伝記の実体を暴露し、これを世界史から抹殺することを宣言するものである。（章・十二）

二　中・下段の絵――『基督抹殺論』

絵解きに入ることにしよう。中段および下段から見てゆく。絵の解釈であるから当然多様な見方が可能となる。わたくしも自分の解釈を示すわけであるが、その場合根拠を備えた立言部分と根拠を十分には示しえない推理的要素の濃い部分とがどうしても生じてしまう。これは絵の解釈という本論の性質上やむをえぬことであった。あらかじめ御諒承いただきたい。

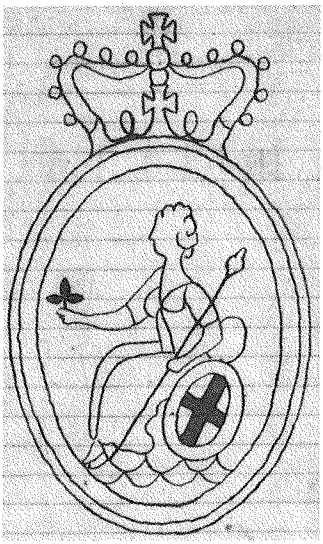
『基督抹殺論』の初版が丙午出版社から出たのが一九一一年（明治四四）二月一日、秋水刑死後八日目のことであった。そしてたちまち七～八千部が売れたという。当時の日本で最も大逆事件に関心を持ち、最も真相に肉迫した一人である石川啄木はかつてわたくしが推定したとおりこの本を読んでいたのである。[5] さて、さきの二つの引用および梗概に加えて✚に関する引用を補充するところからはじめよう。

秋水によればキリスト教の起源は太陽崇拝と生殖器崇拝にあるのだが、この両者の関係はどう考えられるか。「蓋し太陽崇拝は生殖器崇拝を更に理想化せる者の如し。何となれば、両者倶に同一生々の力を崇敬する者なれば也。而して古代各種の信仰は此生殖観念を中心として、其周囲を回転せる者也。」（六六頁）すなわち生殖器信仰こそキリスト教の基底の基底と考えられているのである。では✚の記号は生殖器信仰とどうかかわるのか。「アンニー・ベサントは曰く『……十字の記号は男根の醇化（レフィン）せる者に過ぎず……』」（七二頁）もう一方の●の記号はどうか。「既に男あり、女なかる可けんや。古代の信仰盡く女神あり、之が記号として、女子の生殖器を崇拝するは自然の理也。」「此等女性の記号も、亦一にして足らず。土地、月、海中の星、円……等にして、其多くは婦人生殖器に像れる者にして、其色は黒を用ゆ。」（七六、七七頁）。このようにして「黒」の「円」すなわち●は「婦人生殖器」の記号なのである。かくて啄木の描いた✚はさきに引いたように「男女生殖器を結合せるの記号」であることは確認できよう。

以上に述べてきた全てによって中段と下段の絵はセットになって秋水の『基督抹殺論』をシンボライズしたものであること、これはもはや疑いのないところであろう。

次に二つの絵に関して推理できる事柄を展開してみたい。

このような口絵の全体を啄木が着想するには次のようなプロセスがあった、とわたくしは見る。左の絵をごらんいただきたい。岩城之徳がつとに指摘したようにこの詩集に用いたノートのすかしをまねて描いた扉絵である。複刻版と原ノートのすかしは異なるものであり、原ノートのすかしは鮮明にいくつものページにあらわれる。絵の女の右手



が持つ三つ葉の植物と左腕下の盾（?）の十字のマークのみが赤で着色されている。啄木はこの絵を自ら描き眺めているうちに着想を得たのであると思われる。女は女神であろう。女神と十字架！　我々は今見たばかりであった。女神の記号は女子の生殖器すなわち●なのであった。●と✚！　このとき啄木は『基督抹殺論』の内容をまざまざと想起したのであろう。こうして口絵が構想された。だから下段の絵がもっともキリスト教的なシンボル・十字形そのものではなく、あのような記号になったのであると思われる。また♀の記号は大沢博が指摘したように、雑誌『明星』の表紙などの女神（ヴィーナスなど）の絵によく描きこまれたなつかしい記号でもあったのである。したがって秋水のいう生殖器崇拝をあらわすのに✚でもなく●でもなくまたその外のどれでもなくこの記号を用いたのである。

次に左側にのびるわずかに垂れるように湾曲した部分を考えてみなくてはならぬ。まずこのように伸びることで下段の絵の全体が十字架のイメージに近づく。これはあとで書きたしたものではなくはじめからこのような全体の左側部分として考えられていたのである。なぜなら●は中央に位置していて左側を欠いた場合はその空白は大きすぎ、バ

ランスがくずれることは明白だからである。少々の湾曲はなにを示すのであろうか。わたくしはこの十字架様のものは影なのだと思う。ここには見えない太陽が、同じくここには見えない奇妙な形の十字架を照らしていて、それが地面に影をなしているのである。もし影でないなら、倒れた〝十字架〟なら、この湾曲はありえず、まっすぐに描かれるはずである。つまり湾曲は影であることを示すための技巧なのであろう。（そしてこのことがまた中段の太陽を解釈する一つの手がかりとなる）この湾曲にはもう一つの効果がある。●†と中段の太陽ではいかにも『基督抹殺論』そのものがむき出しになってくる。そのことは上段の絵も含めて考えるとき、あまりに危険な行為となる。ところがこの奇妙な、胴体がふくらんで下部が湾曲した、十字架のようで、それでもない横だおしの形は、描き手の意図を韜晦する機能も持つのである。

中段の絵に行こう。昇る太陽か沈む太陽か。わたくしは解釈のかぎとして『基督抹殺論』の内容と下段の絵とを用いたいと思う。本の内容からすれば沈む太陽でなければならないであろう。イエス・キリストは史的実在人物ではなく、太陽崇拝・生殖器崇拝のかすと断片で作り上げられた生命なき偶像にすぎぬのだから、今やまさに抹殺されるべきだ、これが秋水の主張なのである。また下段の絵との関係からも落日がふさわしい。大地に横たわる〝十字架〟の長く濃い影、これは落日に密接するイメージであろう。（とするならば下段の絵の例の湾曲は、中段の絵の太陽を落日として表象させる機能も担っていたわけである）こうして、この太陽は沈む太陽であろう。次に太陽が黒くぬりつぶされていることの意味を考えてみたい。濃い黄の光芒はコロナであろう。とすればこの絵は皆既日食を描いていることになる。そして黒い太陽は実は太陽そのものではない。これは天文学的にいえば地球上のある地点と太陽との間に位置した月である。[6] しかしそれは太陽の影であるともいえる。啄木の意図からすれば後者でなければならぬ。したがってここでも啄木は実体を描かず影を描いたということができよう。かくて暗黒の太陽という逆説がここに描かれる。幸徳秋水のいう、根本教義から枝葉末節の式典にいたるまでオリジナリティを欠き実体を欠くところのキリスト教、空無であり、「迷妄」であり、「虚偽」であるところのキリスト教が、啄木によってこのようにシンボライズされる。では、太陽の下の青い部分は何を表すか。大沢博は「形は山で色が青

の部分は好きな山と海を結合させたものであろう」という。この形の上部の線は子細に見るとたしかに波ではなかろうと思われる。とくに右端の、小さいもり上がりをもってさらに右にもり上がる線は波のそれではなく山のそれであろう。それに太陽が沈むとすればそこは水平線である。眼前の波ならともかく水平線をこんなに複雑で大きな凹凸をもつ線で描くことはふつうはしないと思われる。山とした場合、大沢も気にしているように色が山らしくない、緑で覆われた日本の山々らしくは。しかし異国の山々としてはどうか。ロッキーやアンデス、ヒマラヤやアルプスならこの色のイメージとなじむものをもつ。わたくしが想定してみようと思うのは数千メートル級の高峰から成るこれらの巨大山脈ではない。しかし二〇世紀はじめの日本人なら外国、とくに西洋の山々として、ことにアルプスに近いことをもって、それらに近いイメージをもったとしても不思議はないと思われる一つの「山地」をここでは想定してみたい。スイス、フランス国境に位置するジュラ山脈である。これは二つの理由による。一つは上段の絵の翼とおぼしきものの上に描かれる人物らしき像とこの山に使われている色が同じであって関連づけた方がよさそうであること（後述）。もう一つは「呼子と口笛」所収の第五番目の詩篇「墓碑銘」中の二行につながりを見ることが可能であること。「かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、／かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。」これはつとに指摘されているようにクロポトキン『ある革命家の手記』（"Memoirs of a Revolutionist"）第四部の9、10にもとづいてイメージされた詩句である。しかもこの口絵を描くに先立つほんの数日以内の時期の推敲によってこの二行は追加されたのである。このとき、秋水の無念の遺著をシンボライズするこのとき、連想するにもっともふさわしい山脈があるとすればそれは"the Jura Mountains"[7]ではなかろうか、と考えるわけである。こう想定するならば次のように推理することが可能になる。「ジュラ山地」は（一八七二年以後の）「数年間、社会主義のなかに無政府的、アナーキスト的な傾向を導きいれて社会主義の発展に重要な役割を果たしたジュラ連合[8]」の所在地であった。いわばそこはバクーニンとその「友」とが作り出した国際アナキズム運動の一大拠点だったのである。啄木にとって「かのジュラの山地」がそのように思い描かれていたとすれば、そしてかの絵の水色の山脈が「ジュラの山地」であるとすればそれはアナ

キズムのシンボルであり、幸徳の思想の核心を示すものということになる。バックの赤い色は赤紙の表紙（『平民主義』等）や赤刷りの表紙（『麵麭の略取』）に使われる赤、無政府共産主義者・社会主義者等の革命旗の赤である。秋水の革命にかけた闘志でもあろうか。黒い太陽はその「山地」のその赤い空の下に今や沈まんとしている。すなわち無政府共産主義者・唯物論者幸徳秋水が己の思想を貫徹して主張したキリスト抹殺論の啄木によるシンボライズということになるのである。

これが中段の絵の私解である。

それにしても「上には雄大荘厳なる太陽を取り、下には健剛素朴なる生殖器を取りて其表現の記号に充て……」（一二一頁）と秋水が説いたところを、啄木はずいぶん巧みに絵にしたものである。

三　上段の絵と「ヨハネ黙示録」

上段の絵に行こう。この動物は爬虫類または哺乳類系統のものと考えてよいであろう。もちろん想像上の動物であろう。大沢はペガサスではないかという。しかしそれにしては首が長すぎる。そしてとくに後肢が短すぎる。尾はつけ根が太すぎ、そして長すぎる。しかも巻き方が馬のようではない。こうした点を考えてわたくしはペガサスとはとらず爬虫類系の動物、ドラゴンととる。

ペガサスは『基督抹殺論』に現われないがドラゴンは現われる。その箇所は次のとおりである。

ミカエルが太陽の天使たるは、猶ほヘルキユレスが然りしが如し。彼れが悪龍と戦ふて之に勝つは、猶ほヘルキユレスが蟒蛇（パイソン）に於ける、ホーラスが妖怪タイホンに於ける、クリシナが大蛇に於けるが如し。波斯人は又悪魔が善に抗敵し、遂に敗滅すべきを信せり。即ち彼等の悪魔なるアーリマンが地獄に囚はるゝは、猶ほ黙示録第二十章のサタンの如く、彼れが天より地に遁げ下るは、猶ほ黙示録第七章の赤龍の如し。（九〇～九一頁）

「黙示録第七章」というのは幸徳の誤りである。「天より地に遁げ下る」「赤龍（あかきたつ）」が出て来るのは第十二章である。さて二つの章のうちの本論に関係ある箇所は以下のとおりである。新約聖書「ヨハネ黙示録」第十二章。

……また一（ひと）つの異象（しるし）天に現はる一条（ひとすじ）の大（おほい）なる赤龍（あかきたつ）

あり之に七の首と十の角あり其七の首に七の冠を戴けり……

斯て天に戦起れりミカエルその使者を率て龍と戦ふ龍も亦その使者を率て之と戦ひしが　勝つこと能ず且つ再び天に居ることを得ず　是に於て此大なる龍すなはち悪魔と呼れサタンと呼る、者全世界の人を惑す老蛇地に逐下さる其使者も亦ともに逐下されたり

第二十章。

われ一人の天使底なき坑の鑰と大なる鎖を手に携へて天より降るを見たり　かれ悪魔と称へサタンと称る龍すなはち老蛇を執て之を千年のあひだ縛置んとす　之を底なき坑に投げ入れ閉こめて其上に封をなし千年過るまで諸国の民を惑すこと莫らしむ

第十二章の「赤龍」はローマの帝政、とくにネロの治世を指すといわれる。「七つの首」とはローマの七つの丘あるいは七代続いた皇帝を、「十の角」とは皇帝の家臣としての十人の王を、「赤」はローマ帝国元老院を示す緋色を黙示する。啄木がこうしたことを知っていたかどうかは今のところ不明である。しかし啄木がかつてこの「ヨハネ黙示録」を愛読したことはたしかである。盛岡中学校五年生のときに書いた美文「高調」においてこの黙示録の第一章から引用を行なっており、そのことを自ら記している。[10]それだけではない。幸徳が『基督抹殺論』において黙示録の章をとり出してこれにふれるのは第十二章と二十章にかかわるこの箇所だけなのであるが、啄木作品への影響が研究者によって指摘されているのもほかならぬこの二つの章なのである。もちろん『基督抹殺論』と啄木のそれらの作品とは何の関係もないのだが、不思議といえば不思議な暗合である。上田哲は「秋草一束」[11]への「ヨハネ黙示録」第十二章の影響を指摘し[12]、今井泰子が詩「夕の海」（『あこがれ』所収）への第二十章の影響を指摘している。[13]浪漫主義時代の啄木にあって「ヨハネ黙示録」中のこの二章は特別に印象ぶかい章だったのである。

啄木が黙示録の十二章をその浪漫主義時代にどう受けとっていたのかを確認しておくことは本稿にとって重要な意味をもつ。「秋草一束」は一九〇四年秋、『あこがれ』上梓のために二度目の上京を控えていた頃の文章である。その第一節が「反抗の人」と題されており、それは以下にあげるような人達のことである。仏陀、キリスト、プラトー、

ルーテル、スピノザ、コロンブス、ワシントン、ワグネル、ニイチェ、トルストイ、ラスキン、ベクリン、兆民、樗牛等。この人たちはみな「熱烈なる真理と美の勇者にして、又猛強なる時代の反抗者」（傍点―引用者）なのであった。啄木はこの点で彼等を賛美する。そして黙示録第十二章が次の一文に現われるわけである。

> 斯くの如き反抗の人の生涯は、乃ち真理の不正に対し、美の醜に対し、向上の堕落に対し、永遠の生命の永遠の死に対し、完全の不完全に対する不休の戦争にして、毒龍の魔軍に勝ちたるミカエルと共に、神意の告示の体現者、不死と理想との天使たらずむばあらざるなり。[14]

「ヨハネ黙示録」はローマの帝制による苛酷な迫害の下に呻吟するキリスト教徒をはげますために書かれた文書であるという。自分が最も尊敬する人々の生涯を時代への反抗の生涯としてとらえ、黙示録のミカエルと龍との闘いにそれらをなぞらえた啄木の読みは黙示録の深奥に迫るものではなかろうか。

ともあれこう読んで約七年の後、啄木は『基督抹殺論』の中にこの第十二章にもかかわる一文を見出したというわけなのである。

四　秋水の黙示録

ところで、この一文を見出したから啄木が上段の絵を発想したのか、といえばそうではない。そのようなことはありえないと思われる。理由は以下のとおり。下段と中段にシンボライズされた生殖器崇拝・太陽崇拝は『基督抹殺論』の根幹をなすモチーフである。しかしさきに引いた『基督抹殺論』中の黙示録に触れた箇所はちがう。そもそもこの箇所を含む「九　基督教の起源（下）」は著者によると次のような意義しかもっていない。「根本的教義に於て、基督教が単に古代異教の遺物たるに過ぎ」ぬことは「七」「八」によって明らかとなったので「九」の目的は更に転じて「其枝葉の信条典礼の二三」を考察することにある（八六頁）云々。そして当該箇所はこの「枝葉の信条」の考察のうちのほんの一例にすぎぬのである。こうして『基督抹殺論』中の当該箇所、黙示録十二章二十章、そして啄木の黙示録理解という線はこのままでは上段の絵と結合できないということになるのである。すでに下段の絵イコール中段の絵

であったとすれば、中段イコール上段でなければなるまい。つまり生殖器崇拝、太陽崇拝と同等の『基督抹殺論』中のモチーフがここにシンボライズされているはずなのである。そしてそれは黙示録中のドラゴンと結びついてくるはずなのである。そのモチーフとは何か。それは心あるすべての人が読みとった『基督抹殺論』の隠されたモチーフ、すなわち「天皇制抹殺論」に外ならない。あらかじめ誤解を避けるために一言する。「抹殺」の語義のことである。一八九〇年前後に、『太平記』に出てくる児島高徳を実在したかどうか疑わしき人物とし、楠公の伝記も否定される部分が多いとした重野安繹や久米邦武らは抹殺博士・抹殺論と旧守派から攻撃されたのであった[15]（その頃秋水は二〇歳前後の若者であった）、「抹殺」とはまさに、史上のある人物や事件を虚妄としてとり去ること、の意である。さて『基督抹殺論』は秋水の遺著であるにもかかわらずほとんど研究されることなく今日に至っている。奇異の感を受けるほどである。そしてこの書に関するほとんど唯一の研究で、しかも高い評価を得ているのは岩波文庫『基督抹殺論』の「解説」（林茂　隅谷三喜男）である。「解説」は天皇制抹殺論の件をどのように論じているか。きわめて慎重で周到な筆のはこびながら、木下尚江、福田徳三、森戸辰男が天皇制抹殺論としてこの書を読んでいることを紹介し、それからこの件に関する筆者自体の考察を行なっている。考察の結論は次のとおりである。「所謂大逆事件に彼がどの程度に積極的に参預していたのか、またその裁判が妥当なものであったか、ということとはしばらく別に、彼が何時の日にか何等かの方法で天皇抹殺を考えていたことは肯定し得るかのようである。仮にキリストに托して実は天皇抹殺がこの著述に秘めた彼の真の意図であったか否かについてはいま俄かに断定することはできない。現在、これを積極的に肯定するに足りる資料はない。しかし、必ずしもそのような推測をも許さないものではないかのようである」（一八八頁）　この結論もまた（考察過程も含めて）きわめて慎重かつ周到であるかのように見える。が、かなり重要な錯誤がある。それはこういうことである。木下らの読みは天皇制の抹殺論であって荒畑寒村の次のような読みと基本的に一致する。秋水が「『基督抹殺論』によって否定しようとしたのは、単に精神界における迷信的権威」であるキリストだけではなく、「彼の真意は……天皇の神性」の「抹殺」にあったのではないか[16]。「解説」の筆者はこういう読みを

受けてその当否を検討するといいながら実は微妙にズレた方向に検討をはじめる。秋水の明治天皇抹殺（＝暗殺）の意図を検討するのである。その結論がさきの引用である。筆者は『基督抹殺論』の真の意図が『天皇抹殺』か否かとの別の問をたてそれに関して結論しているのである。わたくしはこの検討のしかたはそして結論の出し方は誤りであると思う。なぜなら『基督抹殺論』の中に天皇暗殺の意図をつきとめる試みは不毛でかつ不可能だからだ。どんな傍証を書きつらねてもこの書そのものは「真の意図」が「天皇抹殺」にあったことを立証するどのような根拠も示さないであろう。したがってわれわれは木下尚江らの読み方の正否を検討すれば足りるはずである。ごく簡単に見ておこう。

秋水がこの著作の稿を起こしたのが一九一〇年四月上旬。六月一日に逮捕されたときにはあと一四、五枚も書けば脱稿というところまで行っていたといわれる。この書の眼目はまず、キリストは（したがってキリスト教も）虚妄である。ゆえにキリストは抹殺されるべきである。またそうであるならば現代の自分たちはこの迷信からすみやかに脱却すべきである、という点にある。そして秋水はこの書起稿の約一年前にこう述べている。発行前に惨忍なさしおさえにあった『自由思想』初号「発刊の辞」である。

一切の迷信を破却せよ、一切の陋習を放擲せよ、一切の世俗的伝統的圧制を脱却せよ、而して極めて大胆聡明に、汝の信仰、汝の生活、汝の行動が、果して自己良心の論理と宇宙の理義とに合せるや否やを思索せよ[17]

この頃の秋水は天皇暗殺の意図をはっきりともっていた。そしてそれは天皇制に対するもっともラジカルな批判にもとづいていた。したがって「一切の迷信」「陋習」「世俗的伝説的圧制」の中にはキリストやキリスト教が含まれているだけでなく、天皇・天皇制が含まれていた。いや後者こそ眼目であった。同じ号の「編輯室より」にもこうある。

然るに我等は唯に宗教問題のみでなく、一層広き意味に此語を用ゐたい、即ち政治問題にも倫理問題にも経済問題にも婦人問題にも矢張習俗的伝説的迷信的の権威に束縛されないで、常に「道理」を以て最後の且つ唯一の判断者としたい、即ち総ての問題に対し総ての方面に向つて「自由思想」を以て進みたいのです[18]

幸徳はたえず問題を「宗教問題のみでなく、一層広き意味」で考え批判してゆくことをここでも宣言しているわけだが、「政治問題」における「習俗的伝説的迷信的の権威」の筆頭が天皇制でなくてなんであろう。この思想そのものは処刑の日まで変っていないはずであるから――ここでは詳しい論証は省くが――『基督抹殺論』のもっとも深いところに「天皇制抹殺」の意図が秘められていることは確実なのである。被告のうち少くとも何人かが「大逆」罪で死刑にされるであろうことをはっきり悟っていた一九一〇年一一月に、獄中で執筆した「十二　結論―抹殺し了る」という最後の章には、隠された意図が表面に躍り出さんばかりにひしめいている。まさにこれは一つの黙示録である。最後の一節を引いておこう。（　）の中に入れたのはわたくしが見る隠された文字である。

故に予は下の宣言を以て擱筆す、曰く、基督教徒が（日本人が）基督を（神武天皇なりを）史的人物となし、其伝記（古事記日本書紀）を以て史的事実となすは、迷妄なり、虚偽なり。迷妄は進歩を礙げ、虚偽は世道を害す、断して之を許す可らず。即ち彼れが仮面を奪ひ、扮粧を剝ぎて、其真相実体を暴露し、之を世界歴史（日本歴史）の上より抹殺し去ることを宣言す（一二三頁）

どうだろう！　この烈しさは。天皇抹殺の意図はないが、天皇への怨念ははげしく、青白く燃えたっている。そして幸徳を知る人でこの烈々たる天皇制批判を読み落とした人は一人もいまい。もちろん石川啄木が読み落とすはずがない。啄木は木下尚江らとともにはっきりと読みとっていた。だからドラゴンを書いたのだ。ドラゴンは龍（りゅう）だ。龍とは東洋では天子である。こう読めるなら、下段・中段の絵イコール『基督抹殺論』のモチーフという等式に照応する、上段の絵イコール『基督抹殺論』の（隠された）モチーフ、という等式がなりたち、故に三つの絵は太い等号で結ばれることになる。

五　啄木の黙示（その1）

問題はまだ解けていない。ドラゴン＝龍＝天皇であるとして、この絵はいかにして天皇制抹殺論を黙示しているのか。これが考察されるべきであろう。

上段に天皇制抹殺論というモチーフをシンボライズすることをきめたときまずはじめにイメージしたのは天皇＝龍

の等式であったと思われる。この等式をシンボライズしていくにあたっては以下の考慮や意識が働いたであろう。

○「大逆」事件における権力の凶悪さをひしひしと感じていた啄木であるから、ここに直接東洋風の龍を描くのは危険きわまりないことなのは百も承知であった。この絵を描いていたときどこまで本気で出版を考えていたかは疑問であるが、心理の上では人に見られることを意識していたであろうから、難解な中・下段の絵と同じように、簡単に真意を読みとられないものにせねばならなかった。

○　安全のためには（「大逆」罪にひきずりこまれないためには）『基督抹殺論』をシンボライズしたものだと万一見破られても、すべてがこの書の中に見える叙述にもとづいて図案化したに過ぎぬと弁解できるものでなければならなかった。したがって先に引用した『基督抹殺論』中の叙述は格好の一節だった。

○　上段の絵を描こうとしたとき啄木はすでに、右の一節に出てくる黙示録の第十二、二十の両章を念頭においていたであろう。若いときあれほども黙示録に影響された啄木である。しかも『基督抹殺論』には（ミカエルが）「悪龍と戦ふて之に勝つは、……が……に於けるが如し」「悪魔が善に抗敵し、遂に敗滅す……」とあり、さらに「……悪魔……が地獄に囚はるゝは、猶ほ黙示録第二十章のサタンの如く、彼れが天より地に遁げ下るは、猶ほ黙示録第七章（第十二章―引用者）の赤龍の如し」と両章のいわば梗概までが示されているのである。これを読んだ啄木はまず両章に関する記憶をよみがえらせていたであろう。そして「秋草一束」で象徴化していたミカエルと悪龍の関係を、かの思想的研鑽を積んだ啄木[19]が大逆事件との関係においてとらえなおし活用することを着想するのは自然の道行きだったであろう。

さて、次に絵そのものを眺めてみよう。子細に見るといろいろな特徴が見出される。まずドラゴンはふつうに見られるそれとちがって前肢は踏んばっておらず前にさし出されている。後肢はほんのわずかしか見えないくらい短く描かれている。腰を落としているのである。このドラゴンはつまり伏せているのである。翼も通常のドラゴンが猛だけしく広げているのにくらべると明らかに勢いを失い、たたまれつつある様に描かれている。尾はどうか。ドラゴンの尾は巻いて描かれるときも尖端は後方のどこかに現われる

がここでは尖端は見えない。股の間に尾を入れた様に描かれている。さらに頭部である。この頭部の前面すなわち顔は向かって左側なのか右側なのか、つまりこのドラゴンは前を向いているのか、うしろを向いているのか。断を下しにくいのである。前向きだ、後ろ向きだと見方を変えるとその瞬間瞬間に前向きにも後ろ向きにも見えてくる。ただ、原ノートの絵によってこれを見ると目の右端の線がひときわ太くなっており、そこがこのドラゴンの瞳であるように見える。したがってこのドラゴンの顔を前向きととった場合にも後ろ向きととった場合にも、その視線は後方に向けられているということになる。視線の先に何があるか。翼の上部に人がいる。人は右手を上げてドラゴンの頭部を指さすごとくである。人は中段の絵の山々と同じ色で描かれている。そしてこの白い龍と青い人のまわりは真っ黒で塗りつぶされている。上段の絵は以上のように描かれている。

わたくしはこの絵を以下のように解釈してみる。この絵はまずさしあたりはヨハネの黙示録第十二章および二十章の図案化である。ただし十二章の方では天使ミカエルは「その使者を率て」「龍も亦その使者を率て之と戦」ったのであって、いわば両軍の闘いであった。そして龍は「七の首と十の角」をもつ「赤龍」であった。他方二十章の方は一人の「天使」がかぎと鎖をもって天からくだって来るのであり「悪魔」である「龍」をとらえてこれを縛り、坑の中に千年間閉じこめて諸国の民を救うというのであった。絵はこちらの方に近いといえる。もちろん十二章をこのように描くこともできる。啄木はともかく二つの章をふまえてこの絵を描いたと言ってよいであろう。

ところで上の段はただ黙示録を絵にしたのではほとんど意義をもたないのであった。「天皇制抹殺論」という隠されたモチーフとの関連があってはじめてこの絵はここに存在できるのであった。黙示録の絵はさらに読み解かれねばならない。そのためには西洋のドラゴンは東洋風の龍とまず読みかえられねばならない。そして龍は天皇制または「天皇の神性」なのであった。龍はいかなる格好に描かれていたか。後方に視線を送り、尾を股の間に入れ、翼を収めつつ伏しているものとして描かれているのであった。この龍に向かって右手を上げている天使は何によみかえられるべきか。幸徳秋水その人、またはさらに広く天皇制に向かって果敢にも対峙しようとした人々でなければなるまい。しかもこの人物はわたくしがジュラの山地と想定した

山々と同じ色なのであった。そこは国際無政府主義運動の一大拠点なのであった。同じ色を使っているのであるから、この人物を無政府主義者と想定してよいのかもしれない。ところで、この天使（＝人物）の頭部の形は奇妙である。どうしたわけか頭頂が尖っている。しかもあごから首にかけてのくびれが明確でなく、鋭角三角形の両辺のように下りてきた頭部の線はそのまま鈍角三角形の両辺の線に変わって両肩の線を構成してしまう。このような像がもたらす奇異の感は、これを編笠をかぶせられた人すなわち囚われ人の絵と解釈するや霧散する。形からいっても解釈上の文脈からいってもこれはやはり囚われて編笠をかぶせられた人、すなわち幸徳秋水と、彼に代表される勇敢な人々、「奪はれたる言葉のかはりに／おこなひをもて語らむとする心を、／われとわがからだを敵に擲げつくる心を」（「ココアのひと匙」）もった人々のシンボルと考えるのが妥当であろう。この人物が龍を糾弾する。龍はすくみ降伏する。幸徳らが弾劾し、挑戦する。天皇制はすくみ降伏する。現実の歴史は反対に天皇制がその凶悪な爪牙をむいて幸徳らを屠った。しかし『基督抹殺論』にもられた幸徳らの思想はこの絵のとおりであった。啄木はそれをこのように描いた。そしてぬりつぶされたまわりの黒い色は当代の日本の暗黒を示しているのであろう。これよりほぼ二年前漱石はすでに次のように述べていた。「日本国中何所（どこ）を見渡したつて、輝いてる断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ」（「それから」）

これで三段の絵に関する私の絵解きは一応結着する。

六　啄木の黙示（その2）

さらにもう一つ解くべき部分が残っている。まわりを囲む植物の枝葉である。これは月桂樹またはオリーブの枝であろう。両者の葉冠はともに古代オリンピア祭などにおいて優勝者の栄冠として用いられていた。月桂樹の葉は互生、オリーブの葉は対生である。この絵の葉は対生に描こうとしたものと思われる。しかしよく見ると五ヵ所ほどは互生に描かれ、二ヵ所はそのどちらでもない一枚だけの葉が描かれている。こうしてみると啄木には互生か対生かといった意識はあまりなかったと思われる。『広辞苑』の「月桂樹」の項の末尾にこの樹は「デザインではしばしばオリーブと混同される……」とある。オリーブと考えても月桂樹と考

えても解釈は変らないはずであるが、啄木のつもりとしては月桂樹だったようである。一九〇二年七月二五日付の書簡にこうある。「美しい詞壇の月桂冠は今具へられた、見よ大理石の卓子の上には人まち顔に輝いて居る。然し其前を遠く矩だつて立つて居て後許り見て居ても其の月桂冠が決して頭に飛でのさる者ではない。『栄誉』とは進んで取る者の手に落つる木の実である。」[20] こうして啄木には月桂冠が最も栄誉ある地位を示すシンボルであるという認識は早くからあることが分かる。しかしオリーブについてはこのような理解を示す箇所はないようである。したがってこのデザインの植物を月桂樹としておく。そしてこれは賞讃の意を、あるいは最高の栄誉ある地位を表わすデザインである。

何に対する賞讃か。賞讃されるべき事柄は三段の絵にこめられているはずである。今度はこの絵にこめられた啄木の思いを分析する必要がある。三段の絵の全体はさしあたり『基督抹殺論』を表わすのであるからまずこの遺著に対する賞讃と考えたくなる。しかし、これは分析を要する。中・下段の絵は秋水のイエス抹殺論およびキリスト教批判のシンボルであった。啄木は自己を「強固なる唯物論者」（無神無霊魂論者）と規定している[21]のであるからこの点では秋水と共通する。しかし啄木に秋水のような偏狭なイエス認識・キリスト教排撃は見られない。むしろさきに見たように少年時代かなり深く聖書に親しんでいる。妹光子は兄から聖書をもらったことがキリスト者への道を歩むきっかけとなったと語っている。一九一一年夏時点でも秋水との間にイエスとキリスト教に関してかなり大きな認識の相違が見られる。たとえばヨハネ黙示録は秋水の『基督抹殺論』の文脈にあっては「古代の太陽崇拝、生殖器崇拝に其源を発せる諸信仰の遺物」（前掲）の一例に過ぎず、「古代神話の糟粕渣滓と残骸断礎」（前掲）の一部分にすぎぬのであって、あのように神秘性に富むものこそ最もはげしく「迷妄なり。虚偽なり」（前掲）と論断されたことであろう。ところが、啄木は黙示録を正反対に扱っている。すでに見たように「秋草一束」において自分がもっとも尊敬する人たち、たとえばイエス、ルーテル、ワシントン、ワグネル、（秋水の師）兆民らを列挙しこの人たちを「熱烈なる真理と美の勇者」「猛強なる時代の反抗者」と讃美したのであった。そしてこの人たちの闘いのシンボルとして黙示録第十二章のミカエルと赤いドラゴンとの闘いを見ていたのであ

った。そしてこの章や第二十章を利用して啄木は上段の絵を描いたのである。幸徳その人は「天使」としてシンボライズされたのであった。黙示録の読みの深さ、確かさにおいて啄木のそれは段ちがいにすぐれている。同時に如上の事実は黙示録に対して、ひいては聖書に対して啄木は秋水と全然異なる態度をとっていたことを示す。すなわち秋水にあって無知と迷妄の書は啄木にあっては一定の条件下では積極的な意味を持ちうる古典の一つなのである。またイエスは歴史上に存在しなかった、と主張する秋水に対して啄木はこの一九一一年八月に「クリストを人なりといへば、／妹の眼がかなしくも、／　われをあはれむ。」と詠んで妹光子をからかっている。啄木はイエスの歴史的存在を認めているのである。こうして見てくると啄木はイエス抹殺の論に対して一定の理解を示したとしても最終的には同意していなかったと言えるであろう。

上段の絵の「天皇制抹殺論」に対して啄木がどのように相対していたかは絵解きの段階ですでに見た。また国家（天皇制はその中枢部分）への反抗の念の形成とその理論化の過程については小著『国家を撃つ者　石川啄木』の第三章と第五章において一応の考察をした。ここでは立論の暗黙の前提としてきた啄木の天皇制批判を資料的に簡単に確認しておくことにしよう。

一九〇七年（明治四〇）一月一日の日記では「聖上睦仁陛下は誠に実に古今大帝者中の大帝者におはせり……予は陛下統臨の御代に生れ、陛下の赤子の一人たるを無上の光栄とす。浜のさざれ石の巌となりて、苔むさむまでも千代に八千代に君が代の永からむことは、我も亦心の底より、涙を伴なふ誠の心を以て祈るところ也」などという啄木であった。だがこれには次の文が続く。「然れども、若し人ありて、聖徳の大なることかの彼蒼の如きを見、また直ちにこの明治文明の一切をあげて讃美し誇揚すべきものとなすあらば、そは洵に大なる誤りなり。……人が人として生くるの道唯一つあり、曰く、自由に思想する事之なり。」[22]明治天皇への崇敬の念と、これとは根本的に対立する「自由に思想する事」とがまだ同居していられるのである。

しかし、この年秋に小国露堂から社会主義を説かれ、明けて一月四日には西川光二郎等社会主義者の演説を聞くなどの経験をもち、一年近い北海道漂泊を経た啄木は一九〇八年二月一一日の日記に次のように記す。「今日は、大和民族といふ好戦種族が、九州から東の方大和に都して居た

蝦夷民族を侵撃して勝を制し、遂に日本嶋の中央を占領して、其酋長が帝位に即き、神武天皇と名告つた紀念の日だ」[23]

ここでは明らかに天皇の神性の否定が見られる。一九一〇年二月の「性急な思想」では権力としての国家の存在をつかみ出した。そしてそれへの反抗の念が頭をもたげているのであった。八月稿の「時代閉塞の現状」では国家に対する宣戦の決意が述べられている。大逆事件発覚後であるから当然国家の頂点にあるのが明治天皇であることは十分に認識しているはずである。一九一一年一月大逆事件に関する「特別裁判一件書類」を読み、この事件の核心をえぐりとった。そして六月、この絵を書いている啄木は「呼子と口笛」ノートの中では元号を使わず西暦を使っている。一九一二年の日記の表記は「千九百十二年日記」である。

さて、啄木の天皇の神性否定――天皇制批判がもっともくっきり現われるのは一九一一年一一月起稿の「平信」四の中の次の一節である。

この島国の子供騙しの迷信と、底の見え透いた偽善の中に握りつぶされたやうな一生を送るよりは、寧ろ露西亜のやうな露骨な圧制国に生れて、一思ひに警吏に叩き殺される方が増しだといふ事を（何度）考へたか！[24]

わたくしが傍点をうったところがその一節である。この傍点箇所に一定の考察を加えて啄木の天皇制批判を読みとり、それを指摘したのは今井泰子である。『石川啄木集日本近代文学大系23』（角川書店　一九六九年一二月）の四七七ページ、五六〇ページに示された今井の見解にわたくしは全面的に賛成であるが、さらに以下の付言をなしてこの見地を固めておきたい。

まず引用箇所に前後する「平信」の文脈を見ておこう。「平信」三では大逆事件後の天皇制国家による言論の抑圧とその下にある社会主義者啄木の苦悩が描かれる。それから四になって、イギリスにおける言論の自由（クロポトキンの『THE TERROR IN RUSSIA』が英国議会の「露西亜問題委員会」によって発行されるほどの言論の自由）に対する羨望が述べられる。そしてこの引用箇所があり、そのあとにロシアの「露骨な圧制」の惨忍非道ぶりを憤怒に満ちて紹介・告発してゆくのである（当然のことながらこの裏側に日本の圧制への告発が、とくに幸徳らを縊った大逆事件後の日本の圧制への告発がある）。さてこのような文脈の中に据えられた引用箇所の中の、傍点箇所の前半部分、「子供騙しの迷信」の

一句から見てゆこう。この一句を理解するためにまず着目すべきなのは、この句に前後する次の小文脈である。それは、民主主義の発達した国イギリス、「子供騙しの迷信と、底の見え透いた偽善」の国日本、「露骨な圧制国」ロシアという文脈である。この文脈における「迷信」の内容として単なる神道や仏教、また天理教のような新興宗教や種々の土俗信仰をもってきてもまったく文脈をなしえない。またこれらではすぐあとの「底の見え透いた偽善」とすら整合できない。ここは明らかに、天皇制という、「子供騙しの迷信と、底の見え透いた偽善」に覆われた圧制国日本、と読むべき箇所である。

この見解のたしかさは次の文章によってさらに裏うちされる。「平信」の一〇ヵ月前に啄木が筆写した幸徳秋水の「陳弁書」の中の一節である。「クラポトキンは倫敦(ロンドン)にゐて自由に其著述を公にし、現に昨年出した『露国の惨状』("THE TERROR IN RUSSIA" ―引用者)の一書は、英国議会の『露国事件調査委員会』から出版いたしました。私の訳した『麺麭の略取』の如きも、仏語の原著で、英、独、露、伊、西等の諸国語に翻訳され、世界的名著として重んぜられてゐるので、之を乱暴に禁止したのは、文明国中日本と露国のみなのです」[25] "THE TERROR IN RUSSIA" を発行するほどに民主主義のイギリス、圧制の日本・ロシアという同じ構図がここにある。ただし、幸徳はここで日本とロシアという二つの圧制国をくくって指摘するにとどめているが、啄木は――九分九厘まちがいなく幸徳の叙述を脳裏にうかべつつ――両圧制国について独自の分析を加えている。つまり特徴づけを行なっているのである。啄木はロシアを「露骨な圧制国」と特徴づける。そしてこれとの対比においてもう一つの圧制国日本を「子供騙しの迷信」の国と特徴づけたのである。この特徴づけが天皇制以外の何を指示しえようか。「子供騙しの迷信」とは明治の天皇制を特徴づけたことばであり、啄木の痛烈な天皇制批判なのである。

さらに次のことにも触れておきたい。「子供騙しの迷信」と書くとき啄木が大逆事件を生なましく想起していることはすでに見たとおりであるが、であるなら、彼は宮下太吉や管野すがのことばも思い起こしていたにちがいない、ということである。啄木は一〇ヵ月前に平出修の特別のはからいで大逆事件をめぐる「特別裁判一件書類」の「初二冊」外を読んでいたのであった。その書類の中に宮下のこんな

言葉がある。「そこで私は、尋常の手段ではわれわれの主義の伝道が困難であるから、我国の元首である天皇を斃し、神と思われている天皇もわれわれ普通の人間と同じく血の出るものであるということを知らせ、天皇に対する迷信を打ち破ろうと思い、機会があったら爆裂弾をもって天皇をやっつけようと決心いたしました[26]」管野はこう言っている、「天子というものは……思想上では迷信の根源になっております[27]」と。（傍点―二ヵ所とも引用者）啄木の「この島国の子供騙しの迷信」という言葉は彼に独自の思想上の歩みとこれに合流してきたこれらの人々の言葉とがまじりあってつくり出されたもの、と考えてよいであろう。

次に「底の見え透いた偽善」について見ることにしよう。これもまた大逆事件が介在している言葉であろう。「A LETTER FROM PRISON」の中に次のくだりがある。

（国民の多数は、この大逆事件は）死刑の宣告、及びそれについで発表せらるべき全部若しくは一部の減刑――即ち国体の尊厳の犯すべからざることと天皇の宏大なる慈悲とを併せ示すことに依つて、表裏共に全く解決されるものと考へてゐたのである[28]。（傍点―引用者）

国民の多数は国家が一方で法にもとづく厳罰を宣告し、他方で天皇の慈悲で減刑するというからくりを使うことは当然と考えていた、と啄木は言う。そしてこのからくりは「国民の多数」から見ればきっと「偽善」ではなかったかもしれない。しかし実際に起こったのは次のような内容を伴ったからくりであった。二〇名近い無実の人々を含む二四名に対して全員死刑の判決を下し（即ち「国体の尊厳の犯すべからざること」を「示し」）、翌日そのうちの一二名だけを特典を以て死一等を減じ、（その無実の一二名を）無期懲役に処した（即ち「天皇の宏大なる慈悲」を示した）のであった。一九一一年一月二一日付国民新聞の記事ではこうなる。見出し「広大無辺の聖恩　十二名の逆徒に減刑の恩命下る」「天地に容れざる悪逆非道の大罪人二十四名に対する判決あるや渡辺宮相は直に参内其旨奏上したるに　陛下には大御気色も動かさせ給はず一語も下され玉はず其まゝ御座あらせられしが軈がて龍顔麗はしく彼等逆徒に対し特典減刑をなすべきやういとも優渥なる御諚を賜はりたれば閣臣等は至仁至慈極りなき大御心に感激し」云々。天皇制に対してすでにきびしい批判をもつ啄木である。大逆事件を根源から認識していた啄木である。彼から見れば天皇制権力のこの猿芝居が「底の見え透いた偽善」でなくてなんで

あろう。「底の見え透いた偽善」がこのケースだけでとらえられていたのではあるまいが、しかしこのケースこそ啄木の言う「偽善」の集約的表現であることはまちがいないであろう。

こうして、「この島国の子供騙しの迷信と、底の見え透いた偽善」とは、まず第一に天皇の神性の否定であり、その当然の帰結としての当代の天皇制に対する峻厳な批判なのである。そしてこの批判的立場は無政府を最後の理想とする啄木の思想の論理的な帰結でもあった。

天皇の神性の否定、天皇制の峻拒、この点で啄木は幸徳秋水と同じ立場にあったのである。

ひるがえって上段の絵について再度考えてみると、あの絵では、青い色の人物が龍を糾弾しており、龍はその人を見上げつつすくんでいるのであった。わたくしはそこに幸徳らの天皇制批判の象徴化を見たのであった。この絵は今やもう一層深い意味をもつ。秋水の天皇制批判という黙示を正確に読みとり、それをヨハネの黙示録の正確な読みの裏側に重ね、さらにその一層下に啄木自身の天皇制批判を重ねたものであったのだ。この絵は、いわば三重の黙示録なのである。

結局啄木が月桂樹によって誉めたたえているのは、直接的には『基督抹殺論』が黙示している秋水の峻厳な天皇制批判であろう（同書のもつキリスト教批判については内容的には同調しないが批判を展開した思想のレベル――迷信を打破し「道理」を以て最後の且つ唯一の判断者としようとする態度など――では理解を示したと思われる）。絵はさらに幸徳秋水その人をシンボライズしたものであろう。啄木と秋水との思想上の精密な比較考察をなした人はまだいない。この考察は今後の問題として残されている。今は啄木における秋水への敬意がいかなるものであったかを摘記するにとどめたい。

まず第一に、秋水は堺利彦らとともに日本における反戦運動の先駆者であった。啄木が日露開戦の報に血を躍らせていたとき秋水はすでに頑強な反戦平和の闘士であった。そして一九一一年六月の啄木もまた日本帝国主義への最も鋭い批判者に成長している。今や啄木は秋水のこの面での偉大さを十分に評価できる。したがって尊敬の念を抱いている。[29] 第二に秋水は日本における社会主義運動の中心人物であり、ある時期までは理論上の指導者でもあった。一九〇九年、一〇年の交に平民社訳（実は幸徳秋水訳）のクロポ

トキン『麺麭の略取』をよみ、大逆事件を経て一九一一年一月、自己を社会主義者であると啄木は宣言するのであるが、この間の啄木に最大の影響を及ぼしたのは秋水であった。[30] 第三に幸徳こそかの強権との間に確執をかもす勇気と果敢な反逆精神とをもつ革命家であった。この側面への敬意がいかに大きなものであったかは大逆事件に関係する啄木の全文章が語っている。「呼子と口笛」はその敬意の最高の結晶でもある。そしてこの敬意は秋水に対してのみならず管野すが、宮下太吉ら大逆事件の多くの被告たちに対しても抱いていたのであった。もちろん啄木は管野らのテロリズムに同調していないし、彼らの思想と行動の根拠であった無政府主義に対してもその理論がもつ「性急」さには同調していない。[31] しかし啄木はこの側面の批判のゆえにかの側面に熱い共感と尊敬と同情とを持てぬようなやわな思想家ではなかった。

わたくしは少くとも以上のような敬意もあの月桂樹にこめられている、と思う。

これをもって「呼子と口笛」の口絵についてのわたくしなりの絵解きを終わる。

【注】

(1) 小著『国家を撃つ者　石川啄木』(同時代社　一九八九年五月)第六章。

(2) この絵の色合いをもっとも原物近く印刷しているのは『新潮日本文学アルバム　石川啄木』(一九八四年二月)である。同書四九頁を必要に応じて参照されたい。

(3) 『啄木と賢治』(みちのく芸術社　一九七六年初夏号)。以下の本文に引かれる大沢の見解はすべてこの論文中のものである。

(4) 第一の引用は幸徳秋水『基督抹殺論』(岩波文庫　一九五四年九月)六六頁から、第二の引用は同七八頁から行なった。以下『基督抹殺論』からの引用は岩波文庫版のページ数を引用文末に入れて示すことにする。

(5) 前掲小著一八九頁。

(6) 啄木に皆既日食に関する以上のような知識があったかどうか、直接にたしかめうる資料はない。しかし盛岡中学校四年生の五月一八日にスマトラ、ボルネオ等で皆既日食が観測されており日本からもスマトラに観測に行っている。授業等でこの程度の知識を得る機会はあったものと思われる。でなければまたコロナを描くこともできなかったはずである。

(7) "I went first to Neuchâtel, and then spent a week or so among the watch-makers in the Jura Mountains." P. Kropotkin, *Memoirs of a Revolutionist*, vol. II, London, 1899, p. 65.

(8) P・クロポトキン著・高杉一郎訳『ある革命家の手記』下（岩波文庫　一九七九年二月）七一頁。

(9) いずれも元訳（すなわち啄木の頃に普及していた版の訳）である。いくつかの旧漢字を新漢字に改め、不要と思われるルビを除いた。一字アキの箇所は文頭に節を示す数字があったがそれを除き、一字アキのみを残したものである。

(10) 『石川啄木全集』（筑摩書房）第六巻、三五一～三五二頁。以下『全集』⑥―三五一～三五二の如く略記す。

(11) 『全集』④―四五～五〇。

(12) 上田哲「啄木のキリスト教受容と社会主義への移行」（笹淵友一編『キリスト教と文学』Ⅱ　笠間書店　一九七五年四月　所収）

(13) 『石川啄木集　日本近代文学大系23』（角川書店　一九六九年一二月）五四一頁。

(14) 『全集』④―四五。

(15) 『明治文学全集』（筑摩書房）第七八巻「解説」（松島栄一）。

(16) 荒畑寒村『寒村自伝』上（岩波文庫　一九七五年一一月）三二七頁。天皇の神性の否定は当時にあっては即当代の天皇制の批判さらには拒否であった。したがって荒畑の言うところは「天皇制抹殺論」なのである。

(17) 『幸徳秋水全集』第六巻（明治文献資料刊行会　一九八二年四月）四七六頁。

(18) 前掲『幸徳秋水全集』四八〇頁。

(19) 前掲小著第五章。

(20) 『全集』⑦―一一。

(21) 『全集』⑦―三四六。

(22) 『全集』⑤―一三〇。

(23) 『全集』⑤―二一七。

(24) 『全集』④―三七二。

(25) 『全集』④―三四六～三四七。

(26) 塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録大逆事件』上（春秋社　一九五九年九月）七八～七九頁。

(27) 前掲『秘録大逆事件』一〇四頁。

「呼子と口笛」の中の「墓碑銘」で「かれは労働者――
一個の機械職工なりき。」とうたったのは宮下太吉をこの詩に埋葬したということを意味する。また「ココアのひと匙」で

われは知る、テロリストの

かなしき心を——
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らむとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは真面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌触りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

とうたったときのこの「テロリスト」の中に宮下や管野が含まれているのである。さらに管野は「古びたる鞄をあけて」によって記念されている。

(28) 『全集』④—三五六。

(29) 『全集』④—三三五～三三八。「林中文庫　日露戦争論（トルストイ）」など。

(30) 前掲小著第五章の二。

(31) 注30に同じ。